Nippon Bauhaus Society
Bauhaus
Bauhaus magazine

パウル・クレーと デュッセルドルフ

実験心理生理学研究所 東京代表
ロレンツ・グランラート

芸術アカデミー（写真１）

私は長い間ドイツの大きな研究機関であるフラウンホーファー研究所の東京事務所長をしておりました。
その後産業総合研究所の研究員、早稲田大学の非常勤講師、東北大学の研究員などをしておりました。出身はドイツのデュッセルドルフです。
デュッセルドルフはドイツで一番大きな河川であるライン川河畔に位置し、ライン・ルール経済圏の中心でルール工業地帯のすぐ南西部に位置しています。
金融やファッション、世界的な見本市の中心都市の一つであります。
日本企業の進出も盛んで、デュッセルドルフ市内には約5,000人の日本人の駐在員やその家族などが居住し、日本総領事館などのあるインマーマン通りは日本人街の様相を呈しています。
1971年にはデュッセルドルフ日本人学校が開校し、多くの卒業生がここで学びました。私は早くから日本と日本人に興味を持ち、来日しました。
　デュッセルドルフはハインリッヒ・ハイネの出身地としても知られています。
また早くから芸術アカデミー（写真１）が建設され多くの優秀な芸術家を排出致しました。デュッセルドルフは芸術の都市と言っても過言でないと思います。
　パウル・クレーはバウハウスで大活躍をした芸術家です。
そして私の最も好きな画家であります。
そのパウル・クレーが1931年にデュッセルドルフの芸術学校に招聘を受けました。クレーはバウハウスとの契約を切り、デュッセルドルフ芸術学校の教授となったのです。しかし1933年にナチスが政権をとるとクレーは作品が退廃的であるとしてナチスの迫害を受けるようになります。
結局芸術学校教授の職を追われ、失意のうちに故郷のベルンへ戻ります。
南原実訳による「クレーの日記」が新潮社から出版されております。
ここにパウル・クレーの子息であり、パウル・クレーの研究家であったフェリックス・クレーが「父クレーの思い出」として解説を書いております。この解説から引用いたします。
「かつてのデッサウの城主はすばらしい公園を造ったものです。花の女神をまつったお寺や、山登りの岩や、人工のヴエスーヴィオ火山のそばを、クレーが逍遥しない月はありませんでした。
私の父は新しい大きな四つの壁にかこまれて大変幸福そうでした。
すぐ隣には、友人のカンディンスキーが住んでいたのです。
かれと互いに腕を磨きあいながら、ここにクレーの芸術は次第に成熟し、やがて完成の域に達したのでありました。
1928年12月にクレーはエジプトへ旅行しました。かつてチェニスへ行ったこともありますが、このエジプト旅行はクレーの造形世界の豊かなテーマの中できわめて大きな役割を占めるものであります。
やがて父はデュッセルドルフの芸術アカデミーの教授に呼ばれて行く事になります。バウハウスで同じことを繰り返し教えるのにいささか嫌気がさしていたので、父は喜んでこの招聘を受けたのでした。優秀な弟子たちにかこまれたアカデミーの静かな雰囲気を父は望んだのでした。こうして、バウハウスから離れ、２週間ごとにまたデッサウとデュッセルドルフのあいだを行ききすることになりました。
両方の町に素晴らしいアトリエを持ち、遠くに置いてきた未完成の子供達（作品）のことを考えては期待に胸をはずませました。西欧的な雰囲気のある、瀟洒なライン地方のこの町は、特にクレーの気に入ったようでした。
パリに似たところもあったのです。陽気な町の空気のためか、かれの作品は苦渋を脱した軽やかな色彩を持つようになりました。ただ適当な住居がないのには困ったようでした。なかなか決心がつかず、家族がデュッセルドルフへ引っ越したのは、1933年5月1日の事でした。
（ハインリッヒ街36番地、部屋数は７つ）

こうしてデュッセルドルフへ移ったものの、毎日は暗澹たるものでした。
ヒトラーが政権をとったためなのです。デッサウでもナチスの親衛隊の家宅捜索を受けましたが、やがてここのアカデミーからも追放され、クレーは新居の小さなアトリエに引きこもることになりました。ベルンへ帰ろうとい言い出したのは母でした。母こそ先見の明があったと言えましょう。
しかし引っ越しの準備はなかなか進まず、故郷の町ベルンに移ったのは年の瀬もおしつまる頃でした。あれほど愛したドイツの地は、二度と踏むことをゆるされなくなったのです。
父の悲しみはいくばくか—ここでは父の手紙をそのまま引用するのが良いと思います。

「シャドウケラーにて、1933年12月22日

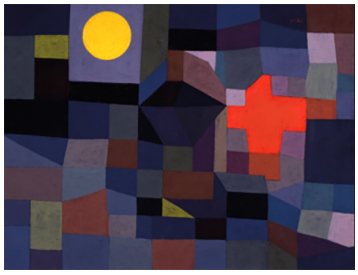
愛するフェリックス、大好きなフロスカ、

引っ越しの後かたづけは終わりました。明晩ここを立てば、すばらしいクリスマスが来て、どの子供の頭の中にも鐘が鳴りひびくことでしょう。私自身、最近めっきり年をとったようだ。
しかし、くよくよしないつもりです。そしてユーモアでもって全て処理したい。男はそうでなくっては・・・。
女だと泣き出したくなるところだろうが・・・。」
少し引用文が長くなりました。
しかし私の好きなパウル・クレーがデュッセルドルフの事を気に入ってくれていたことがお分かりになると存じます。
しかしクレーが好きな町デュッセルドルフをそしてドイツを去らざるを得なかったのは時代が悪かったのです。
時代に翻弄されたパウル・クレーでした。このような時代にあってもクレーは絵を描き続けました。

デュッセルドルフ時代のクレーの絵を紹介し、本稿を閉じます。クレーから見れば外国の地であったドイツを愛し、沢山の名作を残しました。私も外国の地である日本を愛しております。日本で今後とも良い仕事ができることを希望しております。

参考文献
1.南原実訳：クレーの日記、新潮社1961

パウル・クレー



クレーの「Feuer bei Vollmond」「満月の夜の火災」という題です。1933年の作品でDüsseldorf芸術アカデミーで(有)主な学生に取り囲まれ、満足ではあるが、ナチスの弾圧が始まり、困惑した状態を表している。

1933年に描いた絵です。「ある子供が故郷に帰っていく」という題が付いています。バウハウスからデュッセルドルフ芸術アカデミー教授になったもののナチスの弾圧に会い失意のうちに故郷ベルンへ戻る自分の事を描いた作品です。

クレーの1933年の作品「ダイナミック・オブ・ア・ヘッド」という題が付いています。ナチスの弾圧に会い困惑している状態を描いたもの。